

【生命保険は本当に必要なのか?その Ⅰ】

《なま物の人間は必ず病気が災害に遭遇する事実を認識できるかどうか?》

人間とは自然の摂理である生老病死の「真実」に従って、この世に「生まれたら」人生の途中で必ず「病気が災害」に遭遇。生きている間「病気が災害」による病魔と傷害の治療に専念し、「元気な身体」に戻るために、治癒する「医療行為」を「医療機関のドクター」に全幅の信頼に基づき付託します。

ところが日本人1億2千万人強の中には一人ぐらい、私は「病気が災害」には絶対遭遇しないと、否定する人がいるかも知れません。しかし人間いつかは最後には「必ず死ぬ」事を、否定する人は100%誰もおりません。死ぬ時が、生まれて間もない「0歳」なのか、長寿で「100歳」なのかは、その「時期」を予測できる人は誰もいません。しかしいつかは「必ず死ぬ」ことは、予測ではなく「断定」できます。

死ぬ原因は「病気」か、交通事故などの「災害死」などの原因の違いこそあれ、どちらかにあてはまります。ただし「自殺」による死亡は自分が決めて「死亡」に至るので、死ぬ「時期」は本人のみぞ知り得る例外的な「死亡原因」なので、予測不可能な「死亡」を論じるこの「パート」では省きます。

人生の中で、しつこいようですが「病気」と「死亡」の「真実」は、それに「遭遇するタイミング」の「早い・遅い」は別にして、「病気」と「死亡」を避けるのは「不可抗力」である事。この事実を認識しなければ「生命保険」の「必要性があるか否や」に、興味を持つ事は、絶対あり得ないでしょう。

《生命保険の生涯支払い掛け金は驚くほど高額なものです！》

「生命保険」は決して、義理で入るものではありません。その商品の必要性を充分認識しなければ、ちょっとしたマイホームに匹敵する位な大金を「無駄」に保険会社に支払い続ける結果になります。

例えば22歳の新入社員のときに、月掛け1万円3千円の保険に加入してから60歳の退職までの「保険会社に支払う保険料」をシミュレーションしてみましょう。60歳まで38年間の期間に(この保険が10年更新で年齢が10歳アップすることと想定)平均毎月2万円と仮定。年間24万円×38年間で、912万円にもなります。もう少し金額が多ければ、約1千万円にもなります。

1ヶ月の値段にしたら「1万3千円」でも、退職定年時か一生涯までの「支払い金額」を計算してみて、その値段の多寡に驚愕する人が多いのも事実です。「クルマ」でも「マイホーム」でも「液晶テレビ」でも、購入した「物体」を、貴方の手中に納めていれば価値観を理解できる事と思います。しかし保険は、目に見える「物体」ではありません。逆に言えば、目に見えないから分かりにくい「価値観」を、普段気につけないのかも知れませんね。

《病気と災害の治療費にかかるお金をどうしますか？》

「病気」と「災害」の種類は千差万別です。盲腸、痔、骨折、打撲などは手術治療などの短期間入院で治癒します。しかしガン、心筋梗塞、脳卒中などは高度先進医療や最先端治療による高額な「治療費」を要する可能性があります。

短期間で済む病気の場合には、健康保険の自己負担をまかなう「手持ちのお金」があれば、わざわざ「生命保険」に入る必要性がありません。

しかしどんな「病気」になるか、人間誰にも予測できません。「手持ちのお金」がないか、あっても「病気」以外にも生活費用として「手持ち」しておき、「使い果たせない」場合には、最適で合理的な補てん方法が「生命保険」なのです。それでも俺は、病気はしないか、病院にかからないという人は「生命保険」は不要です。

《毎月貯蓄すれば生命保険の加入は不要ですか？》

「生命保険」に加入したつもりで、例えば毎月2万円ずつ貯金しておく方法を選択すれば、1年で24万円、10年で240万円たまります。この間一回も「病気」しなければ240万円がたまります。これを10年、20年と「貯蓄」し続ければ480万円、720万円とたまり続けます。

しかし「ガン」になったり、「心筋梗塞」や「糖尿合併症」になったりした場合には、これまで折角ためた「貯蓄」を取り崩して、「手持ち」のお金がなくなります。しかも「病気」の経験を教訓に、今度こそ「生命保険」に加入しよう。と思いきや「病気」の人は「生命保険」の加入はできません。「(皆さん)こちら保険加入したいときには、(保険会社)あちらから断られる」(親孝行、したい時には親はなくの比喻)

《なかなか貯蓄はできない場合が多いものです》

世間一般的には「貯蓄」をしようと思っても、冠婚葬祭費、子供の養育費、教育費、住宅ローンなど色々な生活費用がかかり、定期的な「貯蓄習慣」が続かない場合が多いものです。

「保険加入」のメリットは、支払わなければ万が一「保険が出ない」ので、必然的に払う義務感が生まれるものです。

「病気も災害」も、何もなければ「貯蓄」は確かにもうかります。しかし何かがあればもうからない、という考え方は「ギャンブル性」が強く、何かがあってからでは時すでに遅しという「あとの祭り」になりかねません。しかも「病気を一度したら二度と病気はしない」ことが分かっていたら、ある程度の「貯蓄」で間に合うかもしれません。しかし残念ながら、この予測は誰にもできません。